

●文祿元年
天草版

吉利支丹教義の研究

橋本 進吉著

本書は東洋文庫所藏に係る文祿元年天草耶穌會學林出版の羅馬字綴りの *Doctrina Christiana* を新たに國字に書改めたものを本體とし、前にその原本の解説と考證を爲し、後にその用語に關する研究を附したもので、猶ほ別冊として原本全部の實大玻璃版複製本を添へてある。其内、用語に關する研究は著者專攻の國語學の方面から詳細且つ興味ある考察がなされてあつて、言語學研究者、吉利支丹研究者等に裨益を與へるこゝ鮮少でない。(菊版假、本編三五二頁、東京東洋文庫發行、價十二圓)

●新群書類從

群書類從が多數の且つ貴重なる古文獻を網羅して吾人に提供し學界に多大の寄與を爲してゐる事は今更喋々を要せぬ事であつて、從來刊行された事も數回に及び、改訂増補された所もあつたが、未だ完本とは稱するこゝを

得ないものである。之に依つて此度内外書籍株式會社は上田萬年、和田萬吉、藤井乙男、三浦周行、新村出、幸田成行、辻善之助、藤村作の諸博士を監修、三上參次、黑板勝美の二博士を顧問に仰ぎ、多數の學者に編輯を依頼して幾多の善本を集めて嚴密に校訂し且つ簡明なる解題及び詳細なる索引を附して利用に便にし、新校群書類從と題して刊行するこゝなつたのは眞に學界の慶事と云はねばならぬ。去る五月第一回配本を爲し、以後毎月一冊づゝ刊行して二十四ヶ月を以て完結する豫定である(菊版、特製六圓、上製五圓、東京内外書籍株式會社發行)(以上松野)

●研究小錄

文學博士 内藤虎次郎著

本書は著者自ら一名を支那學叢考と命名せられてある通り全卷何れも支那學關係の論文のみで書名は甚だ謙遜せられてはあつたが、内容は永く識者に讀まらるべき名篇である。收むる所は主として雜誌「支那學」に管て掲載せられし論文札記にして、之に他の雜誌、單行本等に載せたる

ものを附載してある。殊に價値高きは研究の方法論に關

する論文にして「支那古典學の研究法に就きて」はそれで

あり、「尙書稽疑」、「爾雅の新研究」、「易疑」の如きは專

ら本文研究を試みてその史料としての價値を鮮明せられ

たものである。「宋樂と朝鮮樂との關係」、「章實齋先生年

譜」、「胡適之の新著章實齋年譜を讀む」、「盛伯義祭酒、

「盛伯義遺事」、「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷」、「營造法式の

新印本」、「舊鈔本翰苑に就きて」、「聖武天皇宸翰雜集」、

「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」に前述の三篇を合計十三

篇を以て本文とし、附録として「支那に於ける史の起源」

「禹貢製作の時代」、「拉薩の唐蕃會盟碑」に前述の方法論

の文の四篇を附載す、加ふるに玻璃版を以て拋球樂所用

の拋球門、圓社所用の毬門、章實齋先生筆蹟、盛伯義祭

酒筆蹟、富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷、營造法式、西高辻男

爵家藏舊鈔本翰苑殘卷、聖武天皇宸翰雜集、光明皇后御

書杜家立成雜書要略、慶雲鈔本王勃集詩序、長慶二年唐

蕃會盟碑拓本等十三葉の影片を挿まれたことは、讀む者

には實に興味の多いことである。(菊版三百四十二頁、京

都弘文堂發行、價四・〇〇圓)

● 四 譯 館 則

曩に内藤博士還曆祝賀會の催さるるや、博士は記念事
業の餘資を京都帝國大學文學部東洋史研究室に寄贈せら
れ、東洋史學の進運に貢獻すべき事業遂行を希望せられ
た。本書は此の趣旨に本づき羽田教授が苦心の末に刊行
せられたる稀觀の貴重なる史籍で、上下二卷より成る。

明の四夷館、清の四譯館につきては從來其の建設沿革
典制の詳細を總括記述したる文獻無く斯界の學者皆之を
求めて已まざる勢であつた。然るに故富岡謙藏氏所藏叢
書文叢の中に増定館則と新增館則と謂ふ二篇の文獻あり
その序文に徵し明の嘉靖二十二年、萬曆四十年、崇禎三
年の三度の増輯により郭鏊の館則より續増館則、増定館
則と増加したるを知るべく、富岡家所藏のものは許三禮
霍維翰の手により第四次の増補を加へられたるものにし
て、館の文獻湮滅して知るべからざるを患ひ、廣く文獻
に考へて選述したるものである。凡そ譯館の事項を研究
するに當り本書が貴重なることは申すまでもなし、今回

の重刊に當りては力めて原本の體裁を存し分冊、摺行、空格等全く舊様を保ち、唯原本の一面九行十九字を十二行二十五字と改めたるのみ、東洋史の研究に志す士には必ず座右に一本を備へなければなるまい。吾人は斯の如き貴重なる史籍の刊行を祝し、また刊行についての羽田博士の勞に對しては感謝に堪へぬ。(京都帝國大學文學部東洋史研究室刊行、取次販賣店京都彙文堂書莊、價五圓)

●狩野教授還曆記念支那學論叢

我が京都帝國大學文學部創立當初より教授として學界の爲貢獻せられたる文學博士狩野直喜氏が昭和三年二月十一日を以て華甲の初度に値はれしを以て、豫而昨年春頃より記念論文集を編して贈呈せむとする計畫ありしが今その發刊を見るに至りしは、嘗に同僚友人門生の美しき至情の發現として慶すべきものたるのみならず、我が支那學の進運に寄與せし點より見ても寔に慶賀すべきことである。本書は則ちその論文集にして三十三家の金玉の篇什を齒を叙して排印したるものその題目と筆者は

- | | | |
|------------------------|------|-------|
| 一、車乗考 | 文學博士 | 安井小太郎 |
| 一、擬策一道 | 文學博士 | 内藤虎次郎 |
| 一、通書研究 | 文學博士 | 高瀬武次郎 |
| 一、支那古代の明器殊に象人に就いて | 文學博士 | 松本文三郎 |
| 一、穆天子傳考 | 文學博士 | 小川 琢治 |
| 一、鍾鐻金人につきて | 文學博士 | 藤田 豊八 |
| 一、稗 販 錄 | 文學博士 | 小柳司氣太 |
| 一、支那の孝道殊に法律上より觀たる支那の孝道 | 文學博士 | 桑原 階藏 |
| 一、カントに於ける敬と程朱に於ける敬 | 文學博士 | 藤井健治郎 |
| 一、三跪九叩頭の禮に就いて | 文學博士 | 矢野 仁一 |
| 一、春秋長曆 | 文學博士 | 新城 新藏 |
| 一、易の十翼に對する疑問 | 文學博士 | 宇野 哲人 |
| 一、王朝時代に於ける博士家使用ヲト點譜 | 文學博士 | 吉澤 義則 |
| 一、郎の字音と問の語原 | 文學博士 | 新村 出 |
| 一、沈休文年譜 | 文學博士 | 鈴木 虎雄 |
| 一、全相平話三國志に就て | 文學博士 | 鹽谷 温 |

一、卜法管見 日名 靜一

一、唐宋時代の莊園の組織並に其の聚落としての發達に就きて

文學博士 加藤 繁

一、鼎々高に就て 文學博士 濱田 耕作

一、經學と文學 文學士 本田 成之

一、元朝の漢文明に對する態度 文學博士 羽田 亨

一、致字の訓話を論じて中江藤樹の學說に及ぶ 文學士 加藤 盛一

一、經學に於ける孝經の地位に關する一考察 文學士 佐藤 廣治

一、朱子の窮理論 文學士 澤野章之助

一、漢石經論語殘字攷 文學士 武内 義雄

一、南北曲源流考 文學士 青木 正見

一、大雅文王諸詩の二三の解釋に就て 文學士 岡崎 文夫

一、小説家の正統論 文學士 倉石武四郎

一、高宗彤日の異文に就きて 文學士 神田喜一郎

一、Ikari "amote" Sylvain Léve

一、Les Chansons du Che King au Tonkin

Paul Demiéville

一、"Le Ki-Kouei" 雜貫 de Yi-Tsing et le "Kye-Rim"

雜誌 de l'Histoire M. C. Engenauer

一、Concerning "Tangut Dictionaries" Nicholas Nevsky.

本書は大判一千餘頁の巨冊にして卷首には狩野博士還曆の照像を掲げ、次には講演及講義、既刊文の二項に分類して狩野博士著作目録を掲げてある。各論文の内容の梗概を紹介せむことは紹介者の最も本懐とする所なれども紙幅に限り、暫らく目を記して大方の閱讀を勧むるに留める。(京都弘文堂發行、價八・五〇圓)

●道家の思想と其の開展 津田左右吉著

本書は東洋文庫論叢の第八冊として發刊せられたる大判六百餘頁の大冊である。全卷五篇に分れ第一篇は道家の典籍を考覈して老子莊子呂氏春秋淮南子列子の本文を論じ、第二篇に老子の思想と其の淵源を探究し、第三篇に老子の後の思想界を概観して荀子法名家墨家、享樂養生思想陰陽五行説を論じ、第四篇に道家の思想の開展を觀て仁義禮樂の否認、養生説及び生死觀、虛靜無爲の

心境、知に關する考察及び齊物説、天人の關係及び宇宙觀、文化觀政治觀を考へ、第五篇に漢代の思想界に及ぼせる道家の影響を觀、その研究の方針は思想そのものの開展によりてその思想を深め又は擴充せむとしたる内的運動、他の學派の所説や一般思想界潮流との關係を調査するを目的とし、此の思想を支那人の實際生活若くは民族性との關係を考へむとしたるものである。支那古今を通ずる此の思想界に於ける趨勢を論述したるものとして支那學研究者は一應閱讀すべきものである。(東京、財團法人東洋文庫刊行)

●Memoirs of the Research Department of The
Toyo Bunko 第一冊

本書は豫て歐文を以て邦人の東洋研究の論著を公にして世界の學界の進運に貢獻せむと計畫中なりし東洋文庫の事業がその實行の端緒に入りしものにして收むる所の論文は概ね嘗て邦文を以て學界に發表せられたるものに更に増補を加へたるものである。白鳥庫吉博士の

A Study on the Tiles Kaghan and Katum 濱田耕作博士の
Engraved Ivory and Pottery Found in the Site of the Yin Capital 加藤繁博士の
A Study on the Sun-Fu, the poll Tax of the Han Dynasty 橋本増吉學士の
Origin of the Compass の四篇は英文、鳥居龍藏博士の
Les Dolmens de la Coree の一篇は佛文を以て記述されてあるが、加藤博士の漢代の算賦の研究は嘗て本誌に掲載せられたることを讀者諸彦の記憶に今尙ほ新なる所であらうと思はれるが、本書に於ては更に考覈を加へられてある大判一百餘頁の冊子でその挿入圖版も極めて鮮明であり、從來邦文が歐米學者に疎まれ勝なりし爲我國に於ける東洋學研究の程度が世界的のものなるに係らず、動もすれば國際的にならざりし缺陷を補ひ、我が邦東洋學界の眞價を世界的に發揚する手段として實に適當なる施設なりと謂ふべく、想ふに東洋文庫が學界に貢獻する功績は當に我が東洋學の眞價を發揚するのみに留まらぬであらう。(東京、財團法人東洋文庫刊行)(以上那波)